

NICHD 発達初期における保育と子どもの発達に関する研究の概要
(The NICHD Study of Early Child Care and Youth Development; SECCYD)
: 0歳 から 4歳半までの研究結果から

1. 研究の実施者について

:アメリカ合衆国 保健社会福祉省 国立保健研究所 (NIH) の下部組織である 国立小児保健・人間発達研究所 (NICHD) が本研究の実施主体であり、研究実施に必要な資源を提供している。研究の実施にあたっては、世界中から選ばれた 29 名の発達心理学の第一線の研究者たちが研究ネットワークを組み、NICHD の主導のもとに、1000 世帯を越す大規模なサンプルを対象とした長期縦断研究を 1991 年にスタートさせ、現在に至っている。

2. 研究の背景と目的

:1970 年代以降、アメリカの多くの家庭にとって乳児期からの家庭外保育の利用はすでに一般的なものとなってきており、多くの親や個々の保育者、また保育や教育の専門家たちにとっても、“発達初期からの母親以外の他者による保育の利用の是非”について信頼できるエビデンス・ベースドな指針が必要になってきた。こうした国民的なニーズに応えるために、NICHD が主体となって、発達初期での保育体験と子どもの発達との関連を解明する研究が開始されることとなった。この研究が目的としているのは、家庭環境や子どもの個性の違いを考慮しながら、母親以外の人による保育 (non-maternal care) の特徴 (保育の質やタイプ、保育時間) が乳児期から思春期までの子どもの発達と健康にどのような関係を持っているかを短期的・長期的に明らかにすることである。

2. 本研究の特徴

:本研究の最大の特徴は、1950 年代より発展してきた発達心理学の理論と手法を駆使し、また現在、当該の研究テーマに関する第一線の研究者たちを広く集めて有機的にネットワーク化し、よく練られた仮説に基づいて実施されている点にある。また最先端の心理統計学的手法を援用して発達という複雑なプロセスを数量化することに成功しており、信頼できる実証データを提供してきている。大規模で、包括的、かつ子どもの発達プロセスを丹念に追跡した深みのある研究は画期的なものであり、これまでに類をみないものとなっている。

3. 研究の概要

1) サンプルと調査時期

:データ収集は、研究に参加している子どもたちが生後1ヶ月時に開始され、発達に沿って縦断的に調査が継続されてきている。情報収集は表1のように4つのフェイズ(研究期間)で行われた:

表1 研究のフェイズ(研究期間)と参加者数

期間	子どもの年齢と学年	参加者数 (子どもと家族)
1991-1994	第1期, 1歳から3歳まで	1,364 家族
1995-1999	第2期, 小学1年生まで	1,095 家族
2000-2004	第3期, 小学6年生まで	1,073 家族
2005-2007	第4期, 中学3年生まで	集計中

2) 研究の実施地域と対象者の居住地

:全米 10ヶ所の大学関連機関でデータが収集された(図 A-2):

- アーカンソー大学 リトルロック校
- ハーバード大学 ウェズリーカレッジ
- カリフォルニア大学アーバイン校

- カンザス大学
- ノースキャロライナ大学 チャペルヒル校
- テンプル大学
- ピッツバーグ大学
- ワシントン大学 シアトル校
- ウィスコンシン大学 マディソン校

Figure A-2 Locations of Participating Families

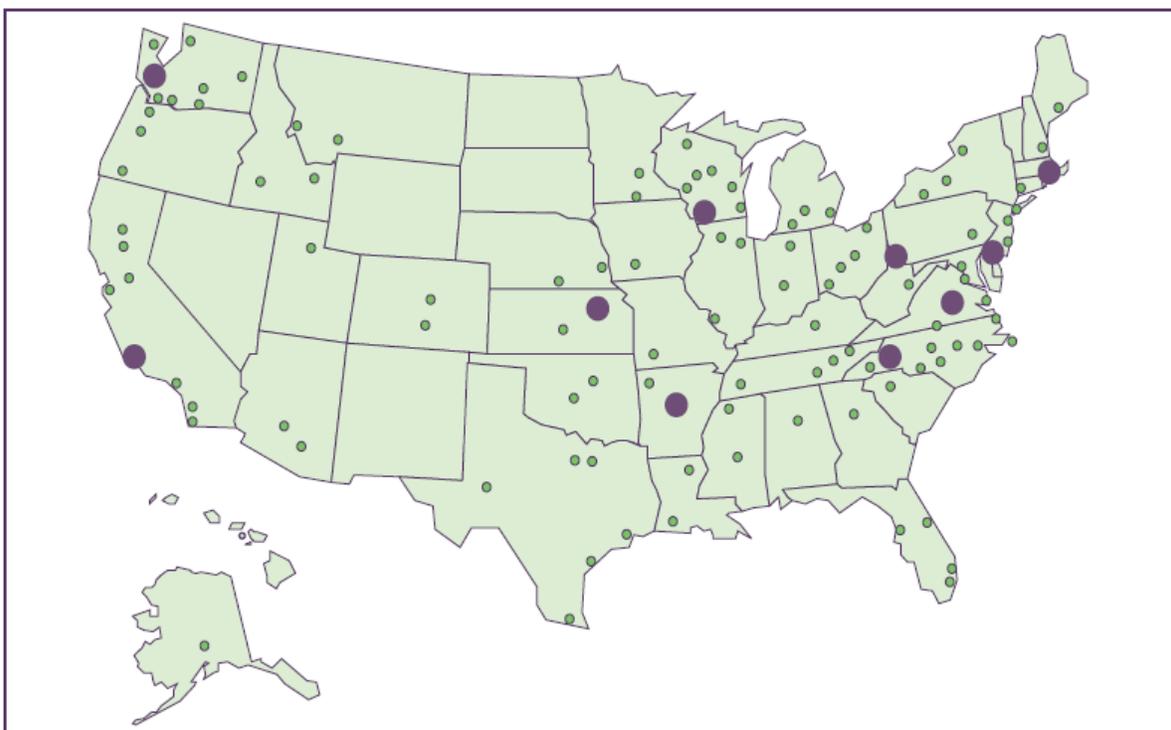


図 A-2 データ収集がおこなわれた地域(大学関係機関の所在地)と研究に参加した家族の居住地
(紫色の点:10のデータ収集機関、緑色の点:参加家族の居住地)

3) 調査内容と調査方法

本研究では、一人ひとりの子どもの特徴や子どもが育っている家庭環境、そして保育施設の環境を含めて幅広い内容のデータが収集されている。データの収集は、子どもの家庭を始め、保育施設、研究所の実験室や面談室など様々な場所で行われ、電話による情報収集やアンケートの郵送なども行われた。アメリカ各地の10の研究機関で行われた研究活動に一貫性を持たせ、様々な先行研究との比較を可能にするために、発達研究で広く使用されている標準的なテストや尺度を使って情報が集められている。主な調査内容は以下の通りであるが、本研究で使われたテストや尺度、観察方法についての詳細はインターネットウェブサイトから入手できるようになっている(<http://secc.rti.org/>):

子どもの特徴

- ◆ 行動- 子どもを知る人によって報告された子どもの環境に対する反応や、研究室での子どもの行動の観察記録

- ◆ 発達- 標準的な発達と比較した子どもの身体的、社会的、情緒的、知的発達の状況
- ◆ 人との関係性- 子どもと子どものまわりにいる人との関係性、これには母親へのアタッチメントとほかの子どもたちとの関係性が含まれる
- ◆ 気質- 子どもの平常時の気分やパーソナリティー特性

家族と家庭環境の特徴

- ◆ 家庭環境- 社会経済的状況と家庭収入を含む子どもが育つ家庭の環境
- ◆ 母親と父親の特徴- 母親、父親、その他の保護者の身体的健康や精神的健康、子育てに対する態度、仕事に対する態度、家族や保育に対する考えなど

保育の特徴

- ◆ 規定的な特徴- 保育のタイプ、大人と子どもの人数比率、保育者の教育レベルと専門教育の程度を含む保育の構造的な特徴
- ◆ プロセス的な特徴- ポジティブな養育と保育の質を含む観察された保育の特徴

4) 本研究で使用されている“保育の質”概念について

① 本研究における保育 (child care)の定義

:本研究では、保育 (child care) を「**母親以外の人(父親や祖父母を含む)によって定期的に行われる子どものケア**」と定義しているが、これは、これまで様々な論争の焦点となってきた“**母親による養育**”(maternal-care)と、それ以外の人による養育(non-maternal care) とを明確に区別して比較検討し、「**本当に発達初期に母親以外の人に預けることが問題を引き起こすのか**」というリサーチ・クエスチョンに一定の結論を出すことを重視した定義であるといえよう。この定義では、不定期、または臨時に行われるベビーシットリングは保育に含まれない。また、母親以外の人へのケアを受けたとしてもそれが週 10 時間以下の場合には、「**母親のみによる養育を受けている**」とみなされている。

② 保育の質 (care quality) の定義

:本研究では、質の中核概念を実際の保育場面で観察可能な行動の多側面から構成されている“**ポジティブな養育 (positive caregiving)**”という概念で定義し、実測している。“**ポジティブな養育**”は保育者の行動の直接的な観察によって評定される保育の質の指標であり、子どもの発達に影響を及ぼすものと仮定されている。ポジティブな養育には以下のような具体的な要素が含まれている:

- ◆ **ポジティブな態度を示す**…保育者は全般的に元気で積極的に子どもに接しているか？ 子どもの手助けを親切にしているか？ 子どもにしばしば微笑みかけているか？
- ◆ **ポジティブな身体接触をする**…保育者は子どもを抱きしめたり、肩に手をやったり、手をつないだりしているか？ 子どもをなぐさめているか？
- ◆ **子どもの発声や発話にตอบสนอง**…子どもが言ったことを復唱したり、子どもが言っていることや言おうとしていることにตอบสนองしたり、質問に答えたりしているか？
- ◆ **子どもに質問する**… 保育者は“yes”や“no”で簡単に答えられるような質問をすることで子どもが話したりコミュニケーションすることを奨励しているか、また、家族やおもちゃについて質問することで、子どもが話をするのを促しているか？
- ◆ **そのほかの子どもへの話しかけ**

- 褒める・「がんばったね！」「よくできたね！」などの表現で子どもの行動を褒めているか？
 - 学びの手助けをする・声を出して文字や数字を読んだり、かたちや物の名前を言ったりして、子どもがこれらのことを習得する手助けをしているか。年齢が上の子どもに対しては、言葉の意味を説明して学習を助けているか？
 - 物語を語ったり、歌を歌ってあげる・・・物語を語ってあげたり、ものごとを説明したり、歌をうたってあげたりしているか？
- ◆ 発達を励ます・子どもが立ったり、歩いたりする手助けをしているか？たとえば保育者が乳児のケアをしているとしたら、保育者は乳児をうつぶせにしてしばらく寝かせることで背中や首の筋肉が強くなりハイハイができるように手助けしているか？また、年齢が上の子どもに対しては、パズルをする手伝いをしたり、箱を積み上げる遊びをしたり、自分でチャックが閉められるように励ましているか？
 - ◆ よい行動の奨励・保育者は子どもが微笑むこと、笑うこと、また他の子どもと遊ぶことを促しているか？保育者は子どもが他の子どもをおもちゃや道具と一緒に使ったりすることを勧めているか？保護者自身よい行動をお手本として示しているか？
 - ◆ 読む力を伸ばす・保育者は子どもに本を読んであげているか？本を読んであげているとき、保育者は子どもがページをめくったり本に触らせたりしているか？また、年齢が上の子どもに対しては、子どもが絵や言葉を指差したりすることを奨励しているか？
 - ◆ ネガティブな相互作用を回避する・保育者はネガティブな相互作用を避けて、子どもとポジティブな態度で接することに努めているか？何らかのトラブルがあったときでも、子どもとポジティブに相互作用できるように努力をしているか？子どもとのコミュニケーションを大切に、無視することがないように努めているか？

③ 保育の質に影響する構造的要因

：本研究では、大きな仮説の枠組みを設定しており、②で定義された保育の質(ポジティブな養育の生起頻度)をプロセス変数とし、これには保育の構造的変数(設置基準の変数であり、大人と子どもの人数比率・クラス規模・保育者の学歴と保育や幼児教育に関する専門教育歴の4変数を測定している)が影響するだろう、と予想した。この仮説は実証され、これらの構造的変数がポジティブ(大人と子どもの人数比率とクラスサイズが小さいほど、また、保育者の学歴および専門教育歴が高いほど、保育の質は良質なものとなり、それが子どもの行動と発達に良い結果をもたらす、という流れを確認している。

構造的要因 → 保育の質 → 子どもの行動と発達¹

5) 本研究の結果概要

：本研究の結果でまず最も重要な点は、母親による養育でもそれ以外の人による保育でも子どもの発達にはほとんど差がなかった、ということである。ただ単に母親のみによる養育を受けているか、それとも母親以外による保育を受けているかを比べても、これらが子どもに及ぼす影響に差はみられず、母親以外の保育を受けているかどうかという情報だけでは子どもの発達について多くを語るができないことが確認された。この点は、これまでの母親の就労と子どもの発達との関連に関する縦断的研究と一致する結果であり、本研究が最も注目した“maternal care”の無条件的かつ絶対的な優位性は否定されたといえる。

しかし一方で、保育の質や量(時間)、そして保育施設の特徴を詳しく見ていくと、強い関係性とは言いえないものの、保育の特徴の違いは子どもの発達にある程度の影響性を持つことも明らかにされた。以下に主な結果をまとめる：

- ◆ 4歳までの結果では、質の高い保育施設に預けられている子どもの方が、質の低い施設に預けられている子どもよりも、言語と認知発達の面で若干優れた発達を見せている。また3歳までの結果では、質

の高い保育施設の子どもたちの協調性がより高いことが明らかになった。

- ◆ 保育の量(時間)に関しては、母親以外による保育の合計保育時間が短い子どもに比べて、より長い子どもの方に問題行動が少し多めにみられた。しかし、保育時間の長い群でも臨床的に問題となるような病理レベルの問題行動が観測されたわけではなく、あくまでも正常範囲の相対的な差である、と見ることが適当であると総括されている。
- ◆ 比較的大規模の施設型の保育園や幼稚園での保育を受けた子どものほうが、施設型ではない場所や小規模の施設で保育を受けている子どもに比べて言語、認知発達ともにより優れていたが、同時にまた大規模な施設型保育を受けていた子どもの方が問題行動の頻度が若干高めである、という結果も得られている。
- ◆ 子どもの発達は、その子が預けられている保育施設の特徴よりも、親や家庭の要因により強く影響を受けることが明らかになった。子どもの発達に関連する家庭の要因の例を挙げると、「親の教育レベルが高い」、「家族の収入が高い」、「情緒的に多くのサポートがある」、「家庭が知的に刺激的な環境である」「母親の心理的適応がよい」などがあり、これらの家庭の特徴は、子どもの「言語の発達」、「認知の発達」、「社会的行動の発達」、さらには「親とのよい関係」などに関連があった。家庭と親の養育のありかたは、家庭外の保育を受けない子どもたちにとってと同様に、多くの時間を保育施設で過ごす子どもたちのウェル・ビーイングにとっても重要な影響を及ぼすものであることが確認された。

<参考資料>

表2 本研究で用いられた保育基準(構造的要因)

アメリカ小児科学会とアメリカ公衆衛生学会によって推奨されている保育ガイドライン (Child Care Recommended by the American Academy of Pediatrics and the American Public Health Association ⁴)	
* 大人と子どもの人数比率:	6ヶ月から1・歳までの子ども・子ども3人に対して保育者1人 1・歳から2歳までの子ども・子ども4人に対して保育者1人 2歳から3歳までの子ども・子ども7人に対して保育者1人
* グループの大きさ:	6ヶ月から1・歳までの子ども・1グループ6人まで 1・歳から2歳までの子ども・1グループ8人まで 2歳から3歳までの子ども・1グループ14人まで
* 保育者のトレーニングと教育レベル:	高卒以上で、その後何らかの専門的教育を受けた者。これには大学での児童発達学の学位取得者、幼児教育学の学位取得者などが含まれる。

出生時から3歳まで本研究に参加した子どもたちが預けられていた多くの保育施設では、表2のガイドラインの4つの基準を満たしていなかった(表3参照)。特に出生時から2歳くらいまでの時期に使われていた施設で基準を満たしていなかったところが多く、その後より年長になってから使われた保育施設ではこの基準を満たしているところが増加している。

基準	6ヶ月	1・歳	2歳	3歳
大人と子どもの人数比率	36%	20%	26%	56%
観察されたグループの大きさ	35%	25%	28%	63%
保育者のトレーニング	56%	60%	65%	75%
保育者の教育	65%	69%	77%	80%

<本研究のおおまかなまとめ>

* 家庭内外の養育・保育の“質”の重要さ *

アメリカ国立小児保健・人間発達研究所 (NICHD) の研究

(the NICHD Study of Early Child Care and Youth Development: SECCYD)

: 全米10地域・24の病院で1991年に生まれた子どもたち
1,364名の長期縦断研究(継続中、結果報告は4歳半ま
でのもの)

⇒ 家庭要因(経済的要因・養育行動の良質さ)と家庭外
保育の良質さ (保育者と子どもの人数割合、保育者の専
門教育の程度など)が子どもの発達(知的・言語的・行動
的)に影響することが明らかになった。

⇒ 影響の大きさでは、家庭>家庭外。

⇒ 家庭外保育時間の長さや保育施設のタイプ(大規模施
設型)が幼児期の社会性にわずかに否定的な影響がある
ことも報告されている。